

GLOBE *Voice*

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2013 Number 7

東京外国語大学



2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東京外国語大学の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。7号目となる今号は、国際研究拠点として歩み続ける東外大だからこそできる、社会・地域への貢献を紹介します。



Contents

世界へ広がる輪 ——3

学長対談 ——8
立石博高 副学長

graduated active person
in society ——14
会社役員 山田毅
建築士 岡部千里

person doing research ——16
真島一郎／相馬保夫／澤田ゆかり

コラム「聴」 ——22
荻谷康太／松浦寿夫／二本博史

歴史を刻む在学生 ——26
外国語学部4年 酒井友花里

News ——28

特集
世界へ
広がる輪

知の蓄積を
社会と共有する

創立以来、世界の言語と地域文化、そして国際関係について研究を重ねてきた東京外国語大学。その使命は、国際社会に関する豊かな知識と理解をもった創造性あふれる人材を育成するとともに、東外大ならではの知を広く社会に還元すること。長年の研究で培われた有形・無形の知の蓄積を、地域はもとより、社会、日本、そして世界へ広く発信している。

文・グローブヴォイス編集室 写真・竹井俊晴

Case 1

外国語教育に関して、国内でも随一の伝統と実績を誇る東外大が外国語習得のためのノウハウをインターネットを通じて一般に公開している。東外大の教員と大学院生を中心とした100人以上によって開発された、「TUF S言語モジュール」だ。一口に外国語習得といっても、「正しい発音を身につけたい」「とりあえず日常会話だけでも」「まず単語で基礎を固めたい」など人によって目的はさまざま。こ

TUFS 言語モジュール

外国語習得ノウハウを ネットを通じて公開



うした多様なニーズに応えるため、TUF S言語モジュールは、「発音」「会話」「文法」「語彙」の4つのモジュールに分かれている。例えば、急にベトナムに出張が決まったが、ベトナム語を一度も聞いたことがない。発音だけでも速習したい。こんなときはベトナム語の発音モジュールが役に立つ。

現在、カンボジア語やトルコ語など学ぶ手段の少ない言葉を含め、22の言語が一般に公開されている。同じフランス語でも、カナダのケベック州・スイスなど、地域による差異までカバーしているのは東外大ならではの。子供向け英語や外国人向けの日本語モジュールも用意されている。



モンゴル語、インドネシア語、ヒンディー語、アラビア語などの多言語が学べる(トップページのデザインは4月にリニューアル予定)。2012年にはスマートフォン対応版も公開した。



キャンパスは世界中の民族衣装に身を包んだ学生たちで鮮やかに彩られる。2012年の来場者数は延べ4万人。



外語祭

パスポートのいらぬ 5日間の世界旅行

Case 2

ある国のことを知りたいと思ったら、その国を訪ねるのが一番だが、国内にいながらにして外国の雰囲気味わえるのが、外語祭だ。国際色豊かでユニークな企画の数々が評価され、昨年度園祭グランプリの栄冠に輝いた。28の国や地域の食文化を味わえる「専攻語料理店」は、普段なかなか口にできない異国の味を堪能できる。5日間で約30本上演される「語劇」も見逃せない。脚本から演出、字幕に大道具、演者まで、すべて学生の手によって作られるのだが、これがなかなか本格的。ミュージカルにコメディ、文学作品とジャンルも幅広い。

キャンパスの至る所で世界の伝統芸能が見られるのも外語祭の醍醐味。フラメンコ、ベリーダンス、インドネシア舞踊など、世界中の来場者からは、「学校の特色をいっぱい活かしていて素敵でした!」「10代男性」「専攻語料理店の食べ歩きが楽しかった!」「30代女性」と好評だ。毎年秋の5日間を待ち遠しく思うリピーターも多い。

3 インターン派遣 プログラム

国際機関で活躍する 人材の育成を目指す

国際社会では、紛争や貧困、地球温暖化などといった諸問題が深刻化している。国連をはじめとする国際機関の役割がますます重要になる一方、日本ではまだまだこうした舞台で活躍している人材が乏しい。実際、日本は国連への分担金拠出の割合が12・5% (外務省調べ)とアメリカに続き2位でありながら、国連で働く日本人の割合があまりにも少ないのだ。このままでは国際社会での日本の存在感は薄れ、影響力の低下に一層拍車がかかってしまう。

そこで、東外大は「臨地教育実践による高度な国際協力人材養成」プログラムを立案した。東外大の特色である、高度な



インターンを通じて、多国籍の仲間と絆が深まる。

間にインターン派遣に関する覚書をとり交わし、各種国際機関に、大学院総合国際学研究所国際協力専攻の博士前期課程で学ぶ学生たちを次々

現地語資料の読解・分析能力に加え、豊かな臨地体験を駆使して現代社会に生じるさまざまな問題に取り組みハイレベルな専門家の養成を目指すものだ。

このプログラムは2009年に、文部科学省の「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に採択された。これを機に、東外大は、国際連合教育科学文化機関(UNESCO)、経済協力開発機構(OECD)、国際移住機関(IOM)との

に送り出した(※1)。3年間にわたる国からの支援が終了した後も、国際教育支援基金(※2)を活用することで、国際機関へのインターン派遣を続けている。東外大の大きな強みは、高い語学力を養う教育機関であると同時に地域研究の拠点でもあること。単なる支援や援助と異なり、当該地域の社会や文化を深く学ぶことができる。さらにインターン派遣プログラムを経験することで、学生は国際協力と地域研究という2つの視野を併せ持つ。こうした人材を、近い将来、国際機関に送り出すことも東外大の使命なのだ。

(※1)組織的な大学院教育改革推進プログラムのインターンシップの詳細は <http://www.tufs.ac.jp/is/circle/api/> (※2)国際教育支援基金を受けた学生の報告書は http://www.tufs.ac.jp/education/pg/maister/master_internship/

●文部科学省の支援を受けてインターンシップを実施した機関(2010年3月~2012年1月)

国連大学NY事務所	国連人道問題調整事務所(ニューヨーク)
国連人口基金NY本部	国連教育科学文化機関(バンコク、モスクワ、パリ、北京、ウィントフック)
世界銀行エチオピア事務所(アディスアベバ)	経済協力開発機構(パリ)
国際移住機関(ジュネーブ、バンコク)	国連人権高等弁務官事務所(ジュネーブ)
世界貿易機関(ジュネーブ)	国連広報センター(イスラマバード)
国連ジュネーブ事務局	

Voice | 国際協力専攻 インターンシップ経験者の声

小川友理恵 インターン先: 経済協力開発機構(OECD) パリ本部広報局/期間: 6カ月



OECD50周年フォーラムの企画運営に携わりました。大規模な国際会議とあって、あらゆることを経験しました。フォーラムにはヒラリー・クリントン米国防務長官(当時)やフィヨン仏首相(同)、パロウ欧州委員会委員長らが出席され、裏方とはいえハイレベルな国際舞台にかかわることができました。インターンシップでの最大の収穫は、雲の上の存在だった国際機関が、進路の1つとして考えられるようになったこと。同時に、自分に足りない部分を嫌というほど見つけ直す機会にもなりました。

首都圏66の大学の頂点「学園祭グランプリ」のMVPを受賞した第90回外語祭。トロフィーは日比野克彦作。





回を重ねるにつれ、受講者同士も親しくなり、和やかな雰囲気で見られる。

オープンアカデミー 地域や社会に開かれた、 学びの場を提供



T UFSオープンアカデミーは、地域に開かれた学術的な生涯学習の場として、2006年10月にスタートした。東外大による社会貢献の1つで、一般に向けて、グローバル化時代に必要不可欠と教養の獲得をサポートする取り組みだ。

オープンアカデミーは、夜間の語学を中心とした「アカデミー講座」と、学生とともに正規の授業を受講できる「市民聴講生制度」からなる。2013年度のアカデミー講座は、21言語の語学講座と教養講座を予定。フランス語やイ

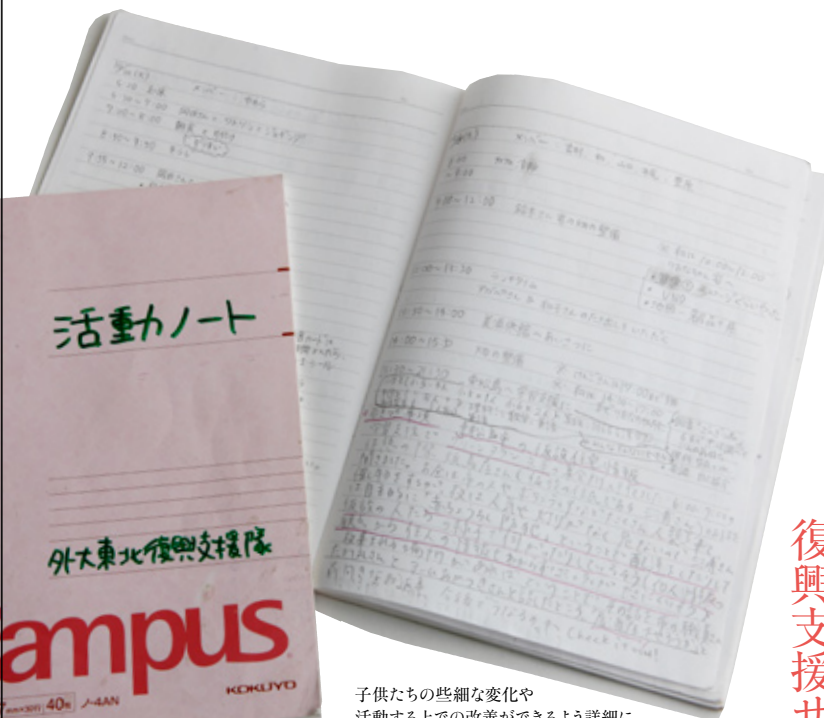
タリア語といった主要言語はもちろんのこと、アラビア語、ベンガル語、オランダ語、ブルガリア語、ウクライナ語などのマイナーな言語が学べるのは東外大だからこそ。コースは「初級」「中級」の2段階のレベルが基本で、12回×90分で受講料は1万8000円。府中キャンパスと本郷サテライト（東京都文京区）で開催している。

「市民聴講生制度」は、高校卒業程度の学力があれば誰でも受講できる。ただし、定員をこえた場合は講師による選考または抽選が行われる。受講料は1万8000円。

Case 東北復興支援 学生自らが発起した 復興支援サークル

2 011年4月、「東北復興のために自分たちで何かできることはないのだろうか」という1人の東外大生の思いから、「外大東北復興支援隊」は誕生した。活動の目的は、被災地で笑顔の輪を広げること。小中学生を対象に学習支援を行うほか、話し相手、遊び相手となった。震災直後、大人は壊れた家やがれきの撤去で忙

しく、なかなか子供の相手ができない状態。安心して子供を預けられる場所は大いに役立った。東外大の留学生も多数参加した。彼らの国の文化を遊びながら子供たちに伝えるなど、異文化交流が行われた。今後は、被災地への経済的な支援も視野に入れ、復興ツアーなども計画している。



子供たちの些細な変化や活動する上での改善ができるよう詳細に活動の様子を記録した。

Voice | 外大東北復興支援隊代表者の声
吉村健吾 ポルトガル語専攻4年
外大東北復興支援隊 代表

福島県いわき市の実家で被災しました。原発事故による風評被害で物資が届かず、電気や水も断絶して辛い日々が続きました。東京に戻ると、買いだめに走る人々を見て、地元とのギャップに苦しみました。自分は東北の人々に寄り添おう、東京の人にも寄り添ってほしいと思い、立ち上げたのが外大東北復興支援隊です。何よりうれしかったのは子供たちの笑顔が増えたこと。最初は甘えん坊で表情にどこか暗いところがありましたが、一緒に過ごすうちに笑顔を取り戻していきました。

グ ローバル化に伴い、日本では外国人の定住化が急激に進んでいる。東外大では、学生が大学での学びを活かしたボランティア活動で、在日外国人児童生徒への学習支援や国際理解教育などを進めてきた。2008年に行われた文部科学省の調査によると、全国の公立学校に在籍している外国人児童生徒約7万5000人のうち、日本語指導を必要としてい

る子供は3割以上。しかし実際は、この数字以上に多くの子供たちが指導を求めていると言われている。こうした子供たちの学習の助けになるよう、多言語・多文化教育研究センターは、学習支援教材をインターネットで無償で提供している。現在、教材は「算数」と「漢字」の2種類で、ポルトガル語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語で利用できる。

子供たちの母語である外国語とイラストを豊富に活用している。

多言語・多文化 教育研究センター 外国人児童生徒向けの 学習支援教材を提供



Case

みんなでいっしょにやろうよ。

1人でやったほうがいいのかと思う。

どう思う？



意見

いけん
opinião

Voice | 卒業生による同様の取り組み
佐々木香織 りてらこや新潟代表
大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学

オーストラリア在住時、自分の子供がサポートを受けながら現地の小学校で楽しく過ごせました。その経験から、新潟市教育委員会の日本語指導協力者として、外国人児童の日本語指導にかかわるようになり、りてらこや新潟を設立しました。留学生の協力を得て、学校の教科書のルビ付けと母語訳版を作っています。今後はDAISY®教材も作っていきたい。より楽しい学校生活を送る助けになればうれしいです。

※Digital Accessible Information System

Case 留学生日本語 教育センター 「あいっえお」から始めて 1年で大学講義レベルに

留 留学生日本語教育センターは、留学生への日本語教育を中心に多様な留学生教育を行っている。メインとなる国費学部進留留

留 留学生のためのプログラム（6カ月コース）や東外大で学ぶ留学生を対象とした全学日本語プログラムを提供している。

学生予備教育プログラム（1年コース）には、毎年、約70人の留学生が世界各国から集まり、日本語をはじめ文系・理系の基礎科目を学ぶ。日本語の学習経験がまったく

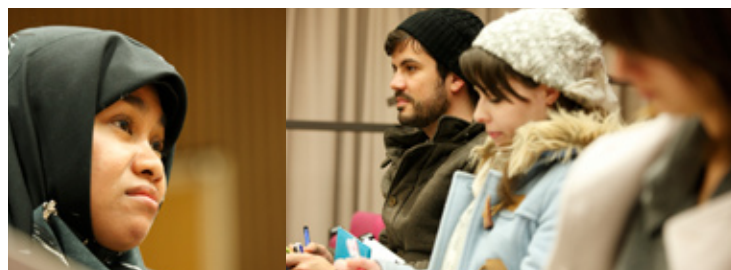
留 留学生の専門分野に関する日本語力の習得も重要だ。文科系学生には、政治経済、日本事情、日本史、数学、理科系学生には、数学、基礎科学、化学、物理、生物などの授業

なかつた学生たちも、1年後には小論文やスピーチなどの表現力を身につけて、日本の大学へ進学していく。ほかにも、研究を目的に来日した研究



を開設している。また、昨年、文部科学省から教育関係共同利用拠点に認定されたため、国内諸大学と連携協働し、日本語教育を展開していく。

文科省の国費外国人留学生と東外大の交流協定校から来ている留学生を受け入れている。



対話と共創によって
未来を拓く

ゲスト
立石博高

副学長

たていし ひろたか
1976年東京外国語大学外国語学部
スペイン語学科卒業、78年東京都立大
学大学院人文科学研究科史学専攻修士
課程修了。同志社大学商学部助教授を
経て、92年から東京外国語大学に在籍。
2013年4月より学長就任予定。著書
に『スペイン歴史散歩―多文化多言語
社会の明日に向けて』（行路社）など。



東

京外国語大学は2012年4月、従来の外国
語学部を改編し、言語文化学部と国際社会学
部の2学部体制をスタートした。歴史的な新時代を

迎えて約1年。学長就任以来、この学部再編に力を注

いできた亀山郁夫学長は、研究・翻訳の両面でも大きな成果を
上げ、著書『謎解き「悪霊」』により第64回読売文学賞、研究・翻
訳賞を受賞した。5年半にわたる任期を務め上げ、新たな一歩
を踏み出す亀山学長。その亀山学長から学長のたすきを渡され

Progress
to the
Next Stage

るのは、2013年4月、東京外国語大学長に就任す
る立石博高副学長だ。学長就任にあたり、「強い意志
とリーダーシップにより、東京外国語大学を、21世
紀を切り拓く対話と共創の場にしたい」と力強く抱
負を語った。さらに、「言語研究と地域研究という2つの柱を
持つ本学こそ、真にグローバル化に対応できる大学」と語り、
すでに目指すべき方向を見据えている。東外大を愛してやま
ない2人が、大学の過去・現在・未来について語り合う。

亀山都夫学長(以下、学長) 東外大は昨年4月、従来の外国語学部を改編し、言語文化学部と国際社会学部による2学部体制がスタートしました。今後学部間の調整には、さまざまな問題が生じると思いますが、対話を基本にした共同作業を進めながら、ぜひ乗り切っていただきたいと思っています。私も5年半にわたって学長職を務めてきましたが、当初思い描いていたビジョンを、曲がりなりにも実現させることができました。これからは立石新学長の下で、東外大が国内外で、十分に存在感を発揮できるよう願っています。

グローバルとローカルを橋渡しする人材が必要

立石博高次期学長(以下、立石) 私は、強い意志とリーダーシップにより、東外大を「21世紀を切り拓く対話と共創の場」にしたいと考えています。一般に、「対話」というのは1対1の関係を意味する言葉ですが、英語の「ダイアログ(Dialogue)」には、



「複数の人間が言葉をお互いに話し合い、創造的な何かを求め合う」という意味があります。

今後は本学でもダイアログを根づかせていきたい。教員や職員、学生、外語会や保護者との間でダイアログを進めてい

くことで、東外大を共に創っていきたく(Co-creation)と考えています。

学長 共創、co-creationというのは良い言葉ですね。豊かな広がりを感じます。ところで、ここ数年、グローバル人材の育成ということがしきりに叫ばれています。しかし、そこでイメージされているのは常に「英語」です。グローバル化は語学、英語と、非常に単純化された議論が行われている。先生は、今の日本でも求められているグローバル人材について、どんなイメージをお持ちですか。

立石 今、日本人が国際的な場で活躍するためのツールとして、英語によるコミュニケーション能力の必要性が叫ばれています。ところが、「グローバル化とは何か」という肝心の議論が、あまり行われていないのが現状です。「国際化(internationalization)」と「グローバル化(globalization)」とは違います。国際化とは「国家が対外的にいかに関わっていくか」ということであり、日本人が外国に進出して、日本のものを外国へ売り込み、日本が必要とする資源を外国から入手するか、ということの意味するとも考えられます。つまり、19世紀後半以降、日本が近代国家になった時点で必要とされたのが、「国際化」だったので。

本学の歴史を遡ると、例えば東京商業学校(現・一橋大学)に統合されていた1892年にスペイン語教育が始まっています。これは日本が中南米に進出するにあたり、スペイン語が必要とされたためです。東外大は、国策としてこうした実用語学を教える大学であると同時に、

ル化に対応した大学だといえるのではないかと思います。

英語と地域言語をいかにバランスよく学ぶか

学長 確かにそうですね。もう1つお聞きしたいことは、「現代において歴史学が果たす役割」についてです。本学には言語研究と地域研究という2つの柱がありますが、歴史学は特に後者のほうで大きな意味を持つと思います。歴史を学ぶことは、現代においてどのような意味があるのでしょうか。また、歴史学を通じて、どのような人材を育てることができ

るのでしょうか。
立石 歴史学は地域研究にとって、欠かせないものです。戦後に盛んになった地域研究(area studies)には、「アメリカがいかに世界の諸地域に対して影響力を持てるか」という発想が色濃く見取れます。地域研究といっても、あくまでアメリカの戦略上の研究だったわけでは



うした発想とは違っていた。ある意味では、グローバル化時代の地域研究を先取りしていた面もあるように思うのです。つまり、1つの国民国家の立場から世界を見るのではなく、幅広く俯瞰的な視点を持って、ある特定の地域にこだわる。地域における社会の仕組みや文化のありようを知るためには、その地域がたどってきた歴史を知らなければなりません。つまり、「ローカルな知」というものが絶対に必要なのです。ただ、世界の激しい変化で、国際関係が複雑化の一途をた

東外大の学生は、非常に健全な精神を持っています

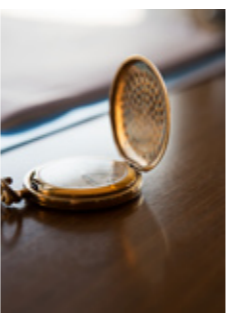
——亀山



教養外国語を教える大学でもあった。この2つの流れが併存してきた点に、本学の特徴があるわけです。

学長 私は、東外大は文学部系の大学だと思いついて、入学するとすぐに「ドストエフスキー研究会」を開いたのですが、なんと1人しか集まらなかった。逆に言えば、当時の本学には、高度経済成長を担う主役としての期待が寄せられていたのでしょうね。

立石 東外大は日本の近代化の過程で、国際化を担う人材を輩出してきました。



どる中、ローカルな場に根ざした地域研究がどこまで通用するか、という問題があるのも事実です。最近では「グローバル歴史学」といって、さまざまな地域に相互に関連する歴史展開のありようを研究する学問も登場しています。

21世紀を迎えた今、過去の伝統とは一線を画した研究に取り組むことも必要でしょうし、これを教育にも還元していかなければならない。2012年4月から、国際社会学部の中に「地域社会研究コース」「現代世界論コース」「国際関係コース」の3つが設けられることになりました。1、2年次に履修する「世界教養プログラム」では地域言語とグローバル教養をしっかりと学び、3つのコースでより専門的知識を学べる授業を提供したいと考えています。

学長 そうですね。先ほど立石先生は、グローバルとローカルが衝突して conflict が起きたときに、その両者の中間に立つてコーディネートやアレンジができる人材が必要だとおっしゃいました。それが、東外大が目指す究極の人材像だとすれば、グローバルな英語と地域言語の両方を習得することが何としても重要になります。大学4年間で、両言語をバランスよく身につけた人材をいかに育てていくのか。これは、私が大きな期待を寄せている目標の1つです。私も長いことロシア語一辺倒でやってきましたが、学長になったことで、英語

グローバル人材育成の鍵は、言語と地域研究にあります

——立石

をやらないわけにはいかなくなりました。2つの言語を併用する必要に迫られて、50代の終わりからそれこそ自己改造を図ってきたわけです。ただ、それではさすがに少し遅すぎるといふ実感を持ちました。若いときは、地域の言語を習得することにエネルギーを傾け、その余力をできるだけ「グローバルスタンダードとしての英語」に振り向けていく必要がある。言語や地域のマイスター、つまり高度専門職業人を徹底して育てることが、東外大の使命だと考えています。

東外大の学生にはガッツがある

立石 先日読んだコマツ会長・坂根正弘さんのインタビュー記事に、こんなことが述べられていました。コマツには「コマツウェイ」という独自の人材育成方法

があつて、英語ができてやる気のない人間は評価しないというんですね。グローバル人材なんてものはない、大切なのはガッツと考える力なのだ、と――まさにそうだと思います。

日本の高等教育は、やる気や自主性を育みにくい状況になっています。しかし、本学の学生は他大学と比べても、はるかにやる気やガッツのある学生が多いのではないのでしょうか。もともと、外国の言葉や文化に強い関心を持っているわけですからね。彼らが本来の関心を育てて、積極性や自主性を身につけていけるように、大学の教職員が仕組みを作っていく



ことが必要です。課外活動もこうした仕組みの1つですし、ボランティアや留学も同じです。なかなか一筋縄ではいきませんが、大学の役割とは、むしろ人間力育成のための教育にあるのかもしれない。その意味では、学生を温かい目で見守りながら、学生が主体的に行う活動の芽を育てていきたいと思っています。

学長 確かに、本学の学生にはガッツがあると思います。新しい言語の習得に伴うストレスを受け入れるというのは、並

大抵のことではありませ
んから。大学で英語を学
ぶこととアラビア語を学
ぶことのストレスの差を
真剣に考えるべきなの
です。自分で新しい言語を
学ぼうと決め、ものすこ

い適応力を発揮して言語を習得し、なおかつその地域まで出かけていく。これこそガッツ以外の何ものでもない。その意味では、東外大の学生は、非常に健全な精神を持っていると思います。

例えば、本学の外語祭では5日間にわたって、世界27言語による語劇や民族料

理の祝典が行われます。このような大学祭は、恐らくほかでは見られないのではないのでしょうか。外語祭というのは、すばらしくコンセンチュアルな大学祭だと思います。昨年12月、「第4回学園祭グランプリ」で、外語祭がMVPを獲得し、全66大学の中で1位になりました。あれは、何よりの朗報だったと思います。

話は変わりますが、立石先生は、2学部体制に移行した後の、言語文化学部の将来についてはどのようにお考えですか。
立石 言語教育を抜きにして、本学の存在は無いと考えています。本学は「公私立では担いきれない多数の言語」を教授

かめやまいくお
1949年生まれ。東京
外国語大学長。ドストエ
フスキー関連の翻訳・研
究や、ソ連・スターリン
体制下の政治と芸術の
関係をめぐる著書が多い。
おもなものには『ドスト
エフスキー 父殺しの文
学』、『翻訳』、『カラマーゾフ
の兄弟』、『罪と罰』ほか。



する大学として高く評価されています。

この役割を果たしていく意味でも、どちらの学部でも、言語教育を効率的かつ堅実にやっていく必要がある。さらに、言語によって生み出される文化への理解を深めることも、言語文化学部の使命です。ローカルとグローバルの conflict が生まれる場の言語と文化を学ぶ上で、言語文化学部が果たす役割は大きいでしょう。

学長 東外大は、これまで、優れた翻訳者や通訳者を数多く輩出してきました。翻訳者や通訳者には、異文化間を取り持つコーディネーターとしての側面がある。このような人材が活躍できる場は、商社やジャーナリズム、銀行などにも広がっています。言葉という現象に精通す



ることが、社会にとっても価値があるということ、先生たちは使命感を持って教えていただきたい。

ところで、本学には27言語の教育体制を備えています。今後増やすことは考えていらっしゃいますか。

立石 今、スペインのカタルーニャ地方で、リングアモンというセンターの構想が進められています。リングアモンとは「世界の言語」という意味で、世界の諸地域の言語を教育研究し、できるだけ多くの市民が多言語主義者となることを目指して活動するというのが、このセンターの目的です。

これこそが、本学が目指すべき理想だと私は考えられています。言語の数を増やすのは

難しいと思いますが、さまざまな資金を獲得しながら可能性を追求していきたい。ちなみに本学では、約60言語の授業を行っています。大学にあるアジア・アフリカ言語文化研究所では、少数話者の言語も研究されていますし、社会還元という形でオーブンアカデミーも組織されています。いずれにせよ、大学として、言語研究・教育を強くサポートしていくことが重要だと考えています。

学長 東外大では数多くの言語が研究されていますが、バルカン地方の言語などは抜けています。しかし、バルカン半島では20世紀末に、人類にとって忘れられないことのない悲劇的な出来事が起こっている。こうした地域の言語にも、学生が関心を持ってくれるといいなと思います。

最後に、留学生についてお聞きします。今回、国際交流会館の3号館が新設され、

今まで以上に留学生の受け入れが可能になりました。これによって、キャンパス自体のグローバル化も進んでいくと思います。キャンパスの多様化について、何かビジョンをお持ちですか。

立石 本学の留学生日本語教育センターには、日本の大学への進学を希望する留学生が、さまざまな国から集まっています。しかし、今までは、留学生と日本人学生が交流する場は少なかったように思います。今後は、カリキュラムを工夫して交流の機会を増やしたり、学生の自主的な活動やサークル、ボランティア活動などを通じて、互いに交流する仕組みを作りたいと思います。

学長 新学長として、東外大の新しい歴史を創っていくことを期待しています。本日はありがとうございました。▼



graduated active person in society_02

人生に無駄なことはひとつもない

岡部千里

建築士

東外大の卒業生といえば、仕事は語学系をはじめとする文系職種イメージが強いが、独力で専門技術を習得し、まったく異なる分野で活躍している人もいる。埼玉県在住の建築士・岡部千里さんもその1人だ。

中学時代に出合った「スペイン子連れ留学」という本がきっかけで、スペインに興味を持った。イスラム教とキリスト教が融合した独特の文化に惹かれ、東外大でスペイン語を学ぼうと心に決めた。

ところが、入学して実際にスペイン語に触れてみると、発音の硬さに馴染めなかった。しかし、海外旅行は大いに楽しんだ。2年生のとき、旅行雑誌「るるぶ」の読者レポーターに選ばれ、16ページにわたってアンダルシア地方の旅行記を執筆。4年生の春には、ユーレイルパスでヨーロッパを周遊する一人旅も経験した。

卒業後はスペイン語を活かし、ペアリングメーカーの貿易部に就職。だが、ペアリングに思い入れが持てず、「女性として一生続けられる仕事がない」という思い



読者記者としてスペインを旅行したことは学生時代の一番の思い出。

おかべ ちさと

1962年埼玉県生まれ。85年東京外国語大学スペイン語学科卒業。5年間のメーカー勤務を経て、建築設計事務所へ転職。95年アトリエ3C+Uを設立し、埼玉県内を中心に住宅・店舗設計を手掛けている。2級建築士、インテリアコーディネーター、古民家鑑定士。

が募っていった。一念発起してインターネットの夜間スクールに通い、インテリアコーディネーターの資格を取得。27歳のとき設計事務所へ転職し、ゼロから建築を学んだ。5年間みっちり修業を積み、2級建築士の資格を取る。実家の新築を手掛けたのを機に、独立。渾身の「デビュー作」が住宅雑誌で紹介され、仕事の依頼も増えていった。

同業者の大半が建築科出身という中で、社会人になってから建築を学んだ岡部さん。ハンディキャップを感じることはなかったのだろうか。

「建築科出身者はハード中心に家作りを考える傾向がありますが、私は意匠デザインや住む人の個性に合わせた家作りなど、ソフト面からの発想が得意。海外旅行で感性を磨いたことが、私の強みといえるかもしれません」

将来は古民家を再生した住まいを作りたい、と夢を語る。

「好きなことを仕事にできることが一番幸せ。少し回り道はしたけれど、人生に無駄なことはひとつもないと思うのです」



graduated active person in society_01

日本の中小企業の国際化をリードしたい

山田毅

会社役員

日本の中小企業は、世界でもトップレベルの技術を持ったところが少なくない。日本経済再生の鍵は、こうした中小企業のグローバル化にかかっている。そんな中、東外大で磨いた語学力と国際感覚を武器に、先頭に立って国際化を進めている卒業生がいる。多摩冶金（東京・武蔵村山市）専務取締役の山田毅さんだ。

山田さんが語学に興味を持ったのは、中学時代に見たインドやイランの映画がきっかけだ。聞き慣れない言葉の響きに惹かれ、「マインナーな外国語」に興味を持った。東外大ではチェコ語を専攻し、合唱とロシア民謡のサークルに所属。音声学に関心があり、チェコ語のほか、ロシア語、中国語、アラビア語など5カ国語を学んだ。

「音声学は、すべての言語の発音を網羅する学問。音声学を学べば、外国人には難しい発音も正しく発音できるようになるので、未知の言語の習得にも役立ちます」

在学中に中国に1年間留学したことから、卒業後は森永乳業に中国要員として入社。2年間の上海



チェコ語専攻ながら、ロシア民謡のサークルでは部長を務めた(左)。

やまだ つよし

1976年広島県生まれ。11歳のときに東大和市に引っ越す。99年東京外国語大学ロシア・東欧語課程チェコ語専攻卒業。99年森永乳業に入社し、2001～03年上海駐在を経験。03年2月に退社し、1年間の世界周遊を経て、04年6月、祖父の代から続く多摩冶金（東京・武蔵村山市）に入社。09年から専務取締役。3代目として会社経営に取り組む。

駐在も経験した。上海支社は20人程度の小所帯で、若手でも会社全体の運営にかかわれる。大所帯では経験できなかった、確かな手応えを感じた。「中小企業で働くほうが、自分には向いている。父の会社で経営にかかわりたい」——そう考え、入社4年目に退社。妻と一緒に1年間世界中を旅した後、2004年多摩冶金に入社した。

多摩冶金は、自動車や航空機の部品などの熱処理を手掛ける会社。山田さんは、航空機製造の国際認証ZETAの取得に尽力。2012年1月、ついに5年越しの夢を叶えた。同社が技術で世界レベルにあることを証明し、航空・宇宙・防衛産業の3分野に本格参入するための道を切り拓いたのだ。

「海外に対する心の壁を取り払ってくれるのが、東外大の良さ。未知の国とのビジネスにも抵抗感がないのは、大学で異文化と向き合う感覚を養えたから。自分の目で世界を見て判断する行動力と思考能力があれば、絶対に世の中に役立つ人になれる。この環境をぜひ活かしてほしいですね」

人類学を超えて人間の根源に迫る

Interview with Ichiro Maehama



まじまじちろう
1988年東京大学大学院在学中にコートデヴィヴォワール共和国で現地調査に従事。92年博士課程単位取得退学後、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手に就任。同助教を経て、2010年在セネガル日本国大使館参事官。2012年に復職し2013年から現職。

真島一郎教授

アジア・アフリカ言語文化研究所

度重なる戦乱で混迷を深める、西アフリカ。

コートデヴィヴォワールで仮面研究を行っていた真島氏は、そこでリベリア内戦に遭遇する。

難民キャンプで目の当たりにした、戦争の過酷な現実。

生身の人間を前にして、人類学には何ができるのか。その問いに対する答えを求めて、真島氏は

新たな道を模索し続ける。

文・吉田雄子 写真・竹井俊晴



真島氏は、言語学、歴史学、人類学をはじめとする複数の視座から、アジア・アフリカ地域の今を再考する。小説の翻訳も手掛けた。



族に伝わる聖なる仮面。人間ではない存在として、ルール破りかがないかを見ている。おもに、裁判などに同席する。

西アフリカで調査中 リベリア内戦に遭遇

コートデヴィヴォワールと聞いて何を連想するだろうか。サッカー好きなら、2度にわたって英国プレミアリーグ得点王に輝いた、ドロバー選手の母国として記憶する人も多いだろう。だが、この国は特に2000年代以降、度重なる内戦により混迷を極めてきた。このコートデヴィヴォワールを中心に調査研究を行ってきたのが、人類学者・真島一郎氏だ。

真島氏が研究者を志したのは10代の頃。古代遺跡を発掘する考古学にロマンを感じ、東京大学の教

養学部に入学した。だが、次第に「今生きている人を研究するほうが面白い」と思うようになり、文化人類学を専攻。大学院では、西アフリカを調査地に選んだ。「西アフリカを選んだのは、『すばらしい世界旅行』に出てくるような、『すごいところ』に行きたかったから。もう1つの理由は、仮面に興味があったからです。大学では観世会に所属し、生きた人間が能面をつけて体を動かすことに、途方もない興奮を感じた。それで、西アフリカで仮面の研究をしようと思ったんです」

アフリカでは宗教的な仮面儀礼が今も脈々と受け継がれている。その実態を調査するため、1988年、リベリアとの

国境沿いにあるコートデヴィヴォワールのダン族の村に赴いた。頼みの綱は、外国人宣教師が作った、古いダン語の文法書の。村に行くと、「何

しに来たんだ」と困惑された。

「2年半の滞在中、同じ言葉が言われ続けました。途中でわかったのですが、それは『白人』を意味する名詞だったんです。当時は、目の前で起こっていることを記録するのが人類学であって、過去の植民地研究は歴史学者の仕事だと考えられていた。でも、歴史の重みが堆積した『白人』という言葉が聞くうちに、植民地時代のこと

が気になってきたんです」

「白人」という言葉に込められた、ダン族の暗い感情。それを少しでも理解できればと思い、700km離れた経済首都アビジャンの国立公文書館に飛び込んだ。史料の山と格闘するうちに、100年前のダン族の記録を発見。それは、フランス行政当局がダン族に対して行った、過酷な処罰の記録だった。薄暗い公文書館から外に出ると、いつもと変わらないアフリカの日常が広がっていた。それを目にしたとき、真島氏の心に疑問が浮かんだ。

従来の「民族誌」を超えた 新しい手法を模索

当時、人類学の論文が、今まさに起こっている政治的事件を取り上げるのは異例のことだった。また、その根拠となる史料研究も、歴史学者の専売特許と相場が決まっていた。だが、人類学者としてすべきことは、文化的な儀礼や慣習を記録することだけではないのではないか。アフリカの過去を、人類学の視点で考えることにはそれなりの意義があるはずだ——そう考えた真島氏は、99年、論文集『植民地経験』（栗本英世・井野瀬久美恵編、人文書院）に、植民地文書についての論文を発表する。歴史学との接点を模索したこの労作は、人類学の新しい潮流の先触れともいえるものだった。だが、真島氏の戸惑いが消えることはなかった。難民キャンプで見た光景を、いまだに言語化できずにいたためだ。

コートデヴィヴォワールの作家アマドウ・クルマの小説に出合ったのは、そんな折のことである。その小説には、リベリア内戦の少年兵のことが描かれていた。「この世界にはどうしてもわからないこと、伝えきれないことがある」——作品のメッセージに打たれた真島氏は、小説の翻訳に着手。03

「自分は『すごいところ』に行きたいと思ひ、『すばらしい世界旅行』のノリでアフリカに来た。そして、『仮面を見るとブルブルする』と言いながら仮面の研究をやっている。ちょっと自覚がなさすぎるんじゃないか、と思っただけです」

決定的な事件が起きたのは89年末のことだった。隣国リベリアの武装勢力が、突然、ダン族の村と国境を隔てた村を襲って人々を虐殺したのだ。これが発端となり、リベリア内戦が勃発。真島氏も、日本の緊急援助隊医療チームの通訳として難民キャンプに向かった。

「そのとき、戦争とはどういうものかを初めて知りました。そこで見聞きしたことは、今でも言語化できない。相手が生身の人間だと理解しないまま、イメージ先行で調査を進めれば、現実からどんなしつぽ返しが来るのか——それを、遅ればせながら理解したんです」

帰国後、フィールドワークを基に数篇の論文を発表。その間にも、リベリア内戦は激化の一途をたどっていった。真島氏はついに「ご法度破り」を敢行する。従来の人類学の常識を覆し、「リベリア内戦の展開について」という論文を学会誌に発表したのだ。



フランス植民地時代のアフリカの歴史の歪みを表す木彫作品。アフリカの女性が描かれている。(コートデヴィヴォワール・グロ族、真島氏蔵)

年『アララの神にもいわれはない』——ある西アフリカ少年兵の物語（人文書院）として出版された。「アフリカで起きていることを記録したいと考えたクルマは、人類学者が書いた民族誌を乱読し、『ここにはアフリカの人たちの命が何ひとつ書かれていない』と失望して小説を書き始めたのです。この小説を読むうちに、人類学者が書く民族誌と小説を区別することが、無意味に思えてきました。人類学と文学の区別を超えて、より根源的な問題に分け入っていくのが、アフリカ研究者としての自分の仕事かもしれない、と思ひ始めたんです」

だが、新たな研究手法を模索する真島氏の前に、再び政治の壁が立ちふさがった。99年12月、今度はコートデヴィヴォワールで軍事クーデターが勃発。以来、政情不安でダン族の村に行けない状況が、14年間続いているという。

現在は『マルセル・モース全集』の編纂を進めるかたわら、西アフリカの調査研究に取り組む真島氏。「いずれは現在の研究に区切りをつけ、人類学のロマンに回帰するような仕事が出来たいですね」と、抱負を語る。生身の人間と向き合うことの重さに翻弄され、試行錯誤を繰り返した20年。その迂回の果てに、新たな深化のプロセスが動き始めている。▼

歴史研究の原点は「感動」にある

Interview with Yasuo Soma

尖 閣諸島と竹島の領有権問題を引きつらけに、あらためて「領土とは何か」が問い直されている。だが、四方を海に囲まれた日本と比べると、陸続きのヨーロッパでは、事態はより深刻であった。歴史学者の相馬保夫氏はこう語る。

「例えば、第2次世界大戦の頃まで、中東欧には多くのマイノリティー住民が住んでいました。ところが、ナチスがユダヤ人に対して行ったホロコースト（大虐殺）や、戦後の国境修正と国家再建によって多くのマイノリティー住民が殺害されたり、移住せざるを得なくなったのです」

戦争末期から戦後にかけて行われた、1000万人以上といわれるドイツ人の「追放」は、こうした20世紀のこの地域の歴史の変動を見なければ、理解することができない。

「戦後のドイツでは、彼らの社会的統合はひどく長びき、西ドイツでは『被追放民』団体が『故郷の権

利』を主張し、東欧諸国との関係改善を妨げました。それをようやく打破したのは、1969年に権についたブランド首相の新東方政策であり、国境線の最終的承認はドイツ再統一まで待たなければなりませんでした」



博士課程のときに家族とともにベルリンに留学した。ブランデンブルク門の前で。

東西冷戦下のベルリンで史料研究に没頭

相馬氏が生まれたのは1953年。戦争の話が聞かされて育ち、ベトナム戦争が泥沼化するのを目の当たりにしながら、多感な10代を

過ごした。「どちらかが勝てば解決するほど、問題は単純ではない。歴史を学べば、すべてがわかるかもしれない」——そう思い、受験時に専攻が選べる東京教育大学（現・筑波大学）に進学。ドイツ史と出会ったのは大学3年のときのことだ。非常勤で来ていた東大の西川正雄教授のドイツ現代史ゼミを受講、ドイツ語原典を精読した。「もう少し勉強してもいいかな、と思い」東大大学院社会学研究科に進学。国内で入手できる史料を渉猟して、修士論文「第1次世界大戦期のドイツ自由労働組合」を書き上げた。

相馬氏が東西冷戦下のドイツに留学したのは、博士課程在学中の81年。留学先は、西ベルリンのベルリン自由大学だった。当時、町の真ん中には、東と西を分ける「ベルリンの壁」が威圧的にそびえ立っていた。付近には「飾り窓」と呼ばれる売春宿があり、荒廃した雰囲気があった。

「東西間の政情が緊張するたびに、町にはビリビリした空気が漂って

未知の現実を可視化するマイノリティーの視点

「研究で成果が出るかどうかは、やってみないとわからない。でも、『これは面白い』と直感したことは、長く続けます。本を読んで感動するもよし、現地を訪れて感動するもよし。どこかに心を惹かれる部分がないと、その先が続かない。若い頃に受けた感動を忘れず、少年のような好奇心を持ち続けること。それが研究者にとっては大切だと思います」

相馬氏にとって転機となったのは、88年から10年間を過ごした、鹿見島大学での経験だ。首都圏で育った相馬氏にとって、地方での生活は新鮮な驚きに満ちていた。辺境の視点から見ると、中央の実相がより鮮明に見えてくる。鹿見島時代に「地方の視点」を得たことは、後にマイノリティー研究へと向かう素地となった。

そして2002年冬、相馬氏は運命的な出会いを経験する。ドイツ連邦図書館で、朝から夕方まで史料と格闘していると、偶然、チェコスロバキアからロンドンに亡命したドイツ人社会民主党リーダーについて史料を発見した。

史料をたどっていくと、面白い事実がわかってきた。そのリーダーは、ナチスのズデーテン占領を逃れてプラハに潜伏したが、193

9年にドイツがチェコに侵攻したため、ロンドンに亡命せざるを得なくなった。ナチス政権期のドイツ人亡命者が、各地でどのような活動を行い、各国の外交政策にどのような影響を与えたのか。その足跡をたどっていくうちに、ドイツ史の「本流」からは見えなかったことが見えてきた。視点をマイノリティーの側にずらすことによつて、知られざる歴史の裏側が浮かび上がってきたのである。その面白さに、相馬氏は興奮を禁じ得なかった。

「私が大学院生の頃は社会史が全盛で、個人よりも組織や社会構造を研究対象とする傾向がありました。ところが、歳をとつてみると、亡命者の伝記を調べるのが面白くて仕方ないんですね。思い返せば、10代の頃は、サマセット・モームやトーマス・マンの教

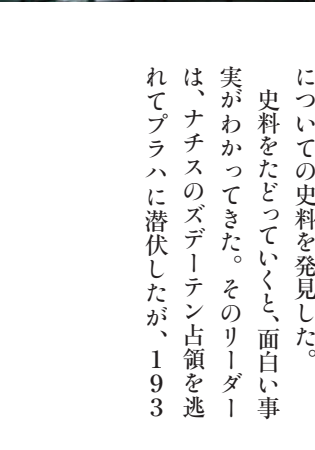
養小説が大好きだった。その時代を生きた人間の軌跡をたどることの面白さを、あらためて実感しています」

そう語る相馬氏は、筋金入りの「鉄ちゃん」でもある。蒸気機関車に胸ときめかせ、歴史の深みに心震わせた少年時代。それが、歴史研究という知の営みを、根底で支えている。■



研究は徐々にマイノリティーの視点に変化していった。著書や共著、監修した本は多数。

〈上〉1989年のベルリンの壁崩壊後に壁の色を再現したブルーノ・タウトの集合住宅(旧東ベルリン)。〈下〉ベルリンの国会議事堂の屋上はドーム型のガラス張り。政治が「透明」であるという民主主義を表している。



「地域研究」という豊穡の世界

Interview with Yukari Sawada



さわだ ゆかり
1986年東京外国語大学大学院地域研究科を修了後、特殊法人アジア経済研究所に入所。89、91年、客員研究員として香港大学に在籍。99年より東京外国語大学外国語学部助教、2009年より現職。共著に「高まる生活リスク——社会保障と医療」（岩波書店）など。

澤田ゆかり教授

大学院総合国際学研究院 国際社会部門

改革開放以降、破竹の勢いで経済成長を続ける中国。一方で、急激な変化に伴い、さまざまな社会問題も浮上している。21世紀の中国社会は、どこへ向かおうとしているのか。それを読み解くヒントは、香港にある、と澤田氏は語る。

香港や華南の地域研究を通じて、現代中国が抱える諸問題に新たな光を当てる。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴

「当時の北京は、馬車が走り、野菜も早春には白菜しかないような時代。外国人専用のレストランやホテルでは人民元が使えず、中国人は中に入ることもできなかった。この二重構造は何だろう、と疑問を感じるようになりました」

『三国志』に導かれて中国語の世界へ

中国への関心が芽生えたのは、1972年のニクソン訪中がきっかけだ。高校では吉川英治や横山光輝の『三国志』にハマり、中国の歴史活劇の世界に夢中になった。「当時の中国には未知の部分が多く、横山先生の漫画も、明朝などの文化や風俗を参考にして描かれていた。そんな美しい誤解から生み出された中国が、とても光り輝いて見えたのです」

将来のキャリア形成のため、大阪外国語大学(現・大阪大学)で中国語を専攻。3年生の春休み研修で北京を訪れた澤田氏は、初めて見る中国の現実に衝撃を受けた。

84年東京外国語大学大学院に進学し、現代中国研究の泰斗である中嶋嶺雄氏の下で、中国の地域研究に取り組んだ。修論のテーマは「満州における抗日運動」。修士課程修了後は、途上国研究のメッカとして知られるアジア経済研究所に入所した。ここで澤田氏は、将来のキャリアの起点となる、貴重な経験をすることとなる。

折しも、85年のプラザ合意により、急速な円高が進行していた。語学力を買われ、香港で円高の調査を任された澤田氏は、これを機に、香港と華南(中国南部)の経済の研究に取り組むこととなる。

89、91年には、客員研究員として香港大学アジア研究センターに在籍。中国への返還を間近に控え、

2006年、南京市で起こったある事件が、中国全土を震撼させた。転倒した老婦人を助け起こして病院に送り届けた青年が、老婦人から「自分を突き飛ばした張本人」として訴えられ、裁判所で7万9000元(約105万円)の支払いを命じられたのだ。

その後、中国各地で同様の事件が頻発。一連の事件の背景には、医療保険が未整備なため、高額な医療費を払うことができない庶民の事情があった。経済学者・澤田ゆかり氏はこう語る。

「中国では、国営企業に勤めて手厚い保険に守られている人もいれば、医療保険に未加入で、病気になる途端に貧困に突き落とされる人もいる。毛沢東時代、中国は世界のモデルと言われる農村医療保険の制度を生み出しました。しかし、改革開放が進んだ今は、貧富の格差のみならず、社会保障の面でも格差が広がっているのが実情です」

13億の人口を抱える中国にとっ

て、社会保障の問題は、まさに国の未来を左右する重大事案にほかならない。そんな現代中国の光と闇を、澤田氏は一貫して見つめ続けてきた。その原点は、小学校時代に遡る。

「10年前の香港は、すでに今の日本が抱える問題に直面していました。貧富の格差や少子高齢化、移民労働者の増加、そして、中国本土からの政治的プレッシャー——こうした問題にさらされながらも、香港の人々はさまざまな顔を使い分けることで、したたかに生き抜いてきたのです」

80、90年代の香港は、まさに改革開放後の中国を先取りする存在だった。だが、その姿は中国のみならず、日本の来るべき未来を予告するものでもあった。

「10年前の香港は、すでに今の日本が抱える問題に直面していました。貧富の格差や少子高齢化、移民労働者の増加、そして、中国本土からの政治的プレッシャー——こうした問題にさらされながらも、香港の人々はさまざまな顔を使い分けることで、したたかに生き抜いてきたのです」

「10年前の香港は、すでに今の日本が抱える問題に直面していました。貧富の格差や少子高齢化、移民労働者の増加、そして、中国本土からの政治的プレッシャー——こうした問題にさらされながらも、香港の人々はさまざまな顔を使い分けることで、したたかに生き抜いてきたのです」



1993年の毛沢東ブームの頃。毛沢東のバッチを集めて作った中国の地図や胸像などが展示された博物館(西安)。

香港を定点観測すれば中国と日本が見えてくる

2012年9月、中国全土で反日デモが吹き荒れたことは記憶に新しい。その折も折、香港では、中国に抗議する大規模なデモが行われていた。新年度の教科書に、中国共産党を礼賛する記述が含まれていたため、「洗脳教育だ」との批判が高まったのだ。

だが、中国への不満がくすぶっている理由は、それだけではない。その1つに、中国本土からの「越境出産」の問題がある。「香港で生まれた子供は、香港の永住権を取得することができる。それをねらって、中国本土から妊婦が大量に押し寄せるようになった。その結果、地元の妊婦が子供を産みたくても産院に空きがない、という問題が浮上したのです。また、香港の大学にも、外資系企業に入る足がかりを得ようと、中国全土から優

秀な学生が集まってくるようになった。放っておけば、香港の大学の学生は大陸出身者で占められてしまう。こうした事態を受けて、香港の納税者の間では危機感が高まっています。とはいえ、中国とつきあわなければ、香港はやっていけないのも事実。香港も日本と同様、「中国大陸とどうつきあうか」という悩みに日々、直面しているわけです」

デフレ、税と年金の一体改革、生活保護費削減、シルバー産業育成——香港の来し方をたどれば、日本の行く末が見えてくる。その意味で、香港は、日本の近未来を読み解くためのショールームと言っても過言ではない。香港や華南を定点観測すれば、中国と日本の全体像に新たな光を照射することができる。そこに地域研究の醍醐味がある、と澤田氏は語る。

「今後は、香港の歴史にダイープに切り込みながら、香港の地域研究をまとめてみたいですね。地域研究をしていると、さまざまな人と交流しながら、異文化や異なる価値観に対等な目線で接することができます。学生時代に1つの地域ととことんつきあうことは、一生の財産になる。友達という目に見える財産と、価値観という目に見えない財産。その両方が手に入るのですから……最高ですよね」



真珠の粉が原料の漢方薬(上)。深川市で初めて私営企業が発行した株券(中)。毛沢東の発言をまとめた語録集(下)。労働者が持ち歩いて汗に耐えられるよう表紙はビニール製。

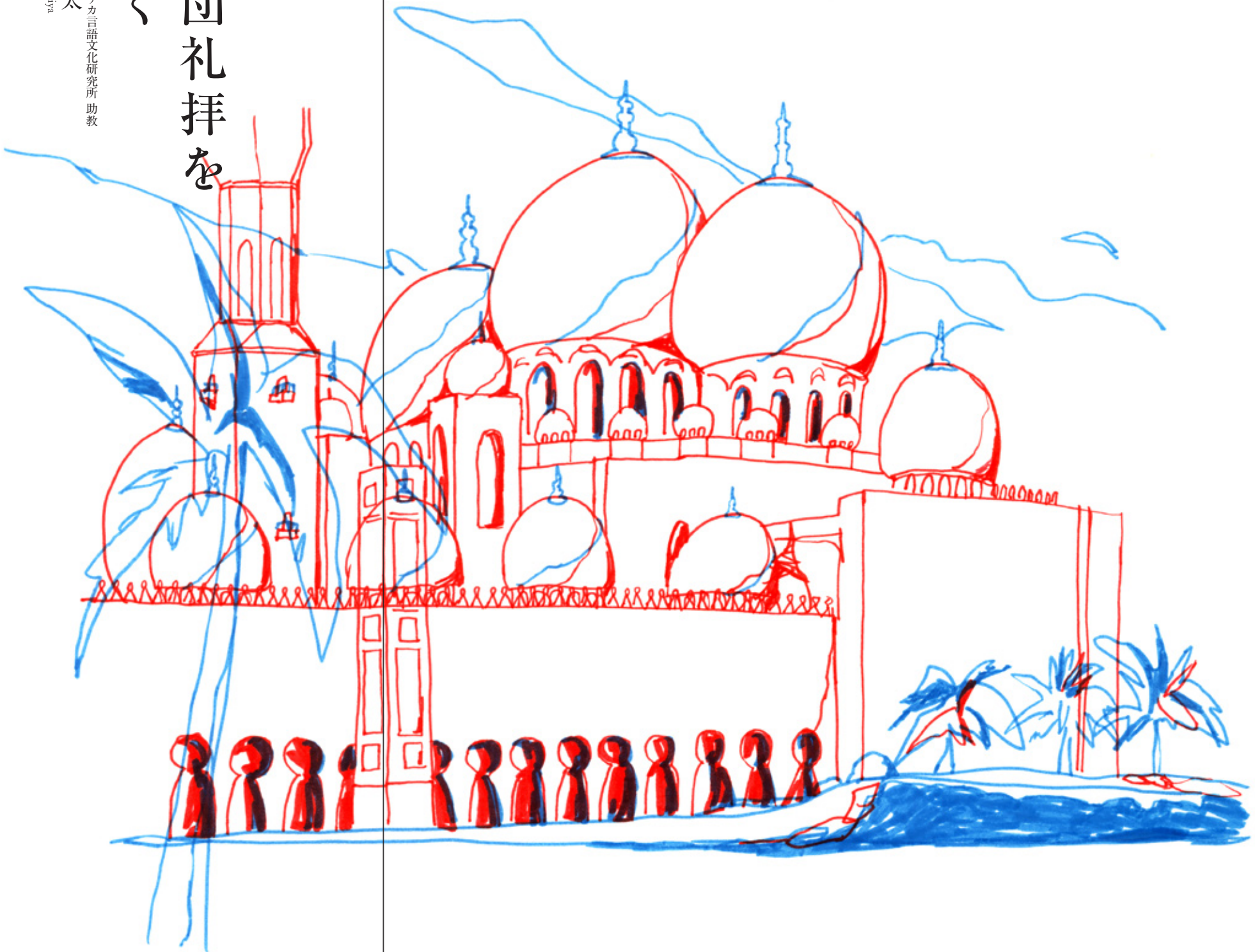


〈右〉瓜を袋に詰める農民たち。シルクロードにつながる西北地方はスイカやメロンの産地。黄砂の大地ではあるが、水さえあれば米も野菜も果物も豊富に収穫できる。〈左〉西安市のタイル工場で働く青年。西部大開発が始まった1993年、内陸省の工業化の実態調査を行った。

「聴」

KIKU

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。



1. 集団礼拝を聴く

アジア・アフリカ言語文化研究所助教
荻谷康太
Text: Kota Kanya

金曜日の 午後、ムスリム（イスラーム教徒）は、モスクに参集する。彼らはそこで、聖地メッカの方向に向かって整然と列をなし、イマームと呼ばれる礼拝の先導者に合わせて肅々と神に祈りを捧げる。基本となる4つの所作（直立礼、屈折礼、座礼、平伏礼）を定められた順序で繰り返す礼拝の集い——そこに生じる印象的な音の空隙を聴く。

* * *

アフリカ大陸西端の国、セネガルは、人口のおよそ9割がムスリムであるといわれる。私は、この国を訪れると、各地を転々としながら、モスクに併設される図書館などで書物を漁る。モスクは、人々の日常生活空間の直中にある。それに隣接する図書館は、静粛を旨とする日本の図書館とは大分様子が異なり、何かと騒がしい。開放された窓の外からは、

モスクを訪れる人々の会話や子供達のはしゃぐ声の流れ込んでくるし、その窓の傍を通りかかった人々は、館内で本を読む慣れぬ私にしばしば声をかけてくる。とにもかくにも、そこには人間の活動が発する音が充満しているのである。

ところが、こうした状況は、金曜日の午後、アザーンという礼拝の呼びかけがモスクの拡声器から発されると一変する。人々は、身支度をして、三々五々、祈りの場へと向かう。気がつくくと、図書館からは人が失せている。そして、モスクへと向かう人々のざわめきは徐々に静まっていき、いつしか礼拝の時間となる。

「アッラーフ・アクバル！」（神は至大なり）——拡声器から発される鋭く甲高い祈りの声。それに合わせて、イマームの背後に列をなした人々は、一斉に所定の祈りの姿勢へと

移行し、そこでびたりと動きを止める。そして、次の祈りの言葉が拡声器から発され、人々がその姿勢を変えるまでの刹那、静寂が辺りを包み込む。静止したまま、彼らはそれぞれ、定められた祈りの文句を囁いているのだが、その囁きがモスクから漏れ聞こえることはない。人間の発する音が完全に途絶えたのを見計らったように、目の前の道を歩く羊がムアアというとげけた鳴き声を上げる。上空の小鳥がキキキと囀る。しかし、そうした音のせいで、人々の祈りが凝固する瞬間のこの静謐（せいでひび）は、辺りの空間に——そして私の内側に——より深く刻みつけられる。

集団礼拝は、この音の空隙を幾度か繰り返して終了する。そして暫くすると、モスクから人々のざわめきが流れ出し始め、いつも通りの音の空間がゆつくりと復元されていくのである。▼

かりや こうた

2010年3月東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程を単位取得満期退学、4月に課程博士（学術）の学位取得。専門は、西アフリカ・イスラーム地域研究。著書に、「イスラームの宗教的・知的連関網」アラビア語著作から読み解く西アフリカ（東京大学出版会、2012年）など。

2. 音の贈り物

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 教授
松浦寿夫
Text: Hisao Matsuura

マイケル・ラドフォード 1996年の『イル・ポステイノ』は、ナポリ沖の小島に亡命を余儀なくされたチリの詩人、パブロ・ネルーダのもとに郵便を届けるマリオが、日々この詩人と接するなかで詩を習得していく過程を描いた映画である。この教育Ⅱ学習の物語はそれ自体きわめて示唆的な物語であるが、ここでは、この映画のなかの一情景を取り上げてみることにしよう。それは、亡命生活を終え故国に戻ったネルーダに向けて、この島での生活の想起を促すために、マリオが島の自然、生活の諸情景を喚起する様々な音の断片、たとえば潮騒、教会の鐘の音などを採録する場面である。この場面を感動的なものとしているのは言うまでもなく音の喚起力が何らかの場所の記憶に対して強力に作用するという確信である。ある同じ場所をかつて共有した他者に対して、この場所の記憶の喚起を促そうとする際、多くの場合、写真のような視覚的なイメージが活用されるのではないだろうか。場所の想

まつうらひさお
東京外国語大学フランス語科卒業後、東京大学大学院人文科学研究所に進学、1988年同博士課程満期退学。85年から88年までパリ第一大学に留学。88年より東京外国語大学に講師として勤務、その後助教を経て2002年より現職。



ふたきひろし
1984年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は、モンゴル史。著書に『モンゴル人の歴史・文化遺産をさぐる』(モンゴル語 2002年)、共著『Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps』(2006年)などがある。

起の補助的な手段として活用される視覚的なイメージではなく聴覚的な記憶に訴えかけようとするこの選択は、当然のことながら、どの場所もそれに固有の音響的刻印を帯びているという事実を教えてくれる。

カナダの音楽学者マリ・シェーファアの構想するサウンドスケープという概念もまた、あらゆる場所が無数の小さな音に満ち溢れているという事実への注目から出発したものにほかならず、各場所の音響的特性を詳細に記述する試みを基礎づけようとしたものがその『世界の調律』(1977年)と題された著作である。このサウンドスケープという概念に立脚したマリ・シェーファアの試みは、既存の場所の音響的環境の分析という側面と同時に、この環境のデザインという側面も備えている。都市景観のデザイン作業が存在するのと同じように、サウンドスケープを設計し、デザインするという企図は、とはいえ一つの原理的困難に直面せざるをえない。というのも境界を画定された空間的な広がりでのデザインに対して、音環境のデザインは必然的に音の境界画定の不可能性と向かい合わなければならぬからだ。そのとき、場所の実際の音響的特性に変更を加えることなく、この場所を異なった音環境のもとに経験することを可能にするという意味で、ウォークマンという装置は、もう一つのサウンドスケープデザインの実践、それもミニマルな実践の装置と考えられるかもしれない。▼

3. 80年代の韓国でキム・スヒを聴く

大学院総合国際学研究院 国際社会部門 教授
二木博史
Text: Hiroshi Furuki

わたしが 1980年代の5年間を短大の日本語教師として過ごした韓国のテジョン(大田)は、鉄道の駅から発展した町で、キョンサンドのプサン方面にいくキョンブク線、チョルラドのクアンジュ(光州)方面にぬけるホナム線の分岐点になっている。学科長につれられて、ご両親のおたくを訪問すると、植民地時代にちいさな駅の駅長をつとめたことがあるという父君が、うたうのは何十年ぶりだとおっしゃって、日本のふるい歌をうたってくれたことをおもいだす。おしえはじめた1984年は、夜間外出禁止令こそ解除されていたものの、軍事政権下であり、毎月一回、民間防衛訓練が実施されていた。サイレンがなりひびくと、通りにいるひとは、かならずちかくのたてもののなかに避難しなければならぬ。北朝鮮との関係が緊張していて、そこから北のスパイを通報した者に多額の報奨金をあたえるというポスターがはってあった。公安当局の人間が学長とあって日本人講師(わ

たしのこと)についていろいろきいたと、学科長があとではなしてくれなかった。わたしの部屋から毎晩、なにか通信しているような音がかきこえるので、不審におもってだれかが通報したらしい。どうやらワープロをうつ音を通信機の音と勘違いしたようだ。韓国での生活は歌がうたえるのが基本だということだが、すぐわかったので、当時、全盛期にあったキム・スヒ(金秀姫)のカセットをかってきた。一度うたうと、かならず「アンコール!」のこえがあがるので、すくなくとも2曲はおぼえなければならぬ。えらんだのは、「ノムナムニダ(あんまりだわ)」と「モンエ(くびき)」だ。何十回も聴いて、完全にマスターした。わたしの歌をきいた同僚の日本語科の先生は、外国人が出演するテレビのど自慢大会にでたらいいと、真顔ですすめてくれた。ソウルでの自分の結婚式で、学生代表にすめられるまま、いつものように、これらの曲をうたったら、大ひんしゆくがあった。ふたつとも別離をうたった曲だったのだ。▼

「世界をこの目で見てみたい」

酒井友花里

ヒンディー語専攻
4年

Influential Face 歴史を刻む 在学生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki



- (1) 旅のお土産は軽くてかさばらないのでストールにしている。模様はその土地の個性が表れる。
- (2) 感じたこと、気がついたことを書きとめた日記帳は数十冊に及ぶ。
- (3) 心と体の健康のためヨガは欠かせない。軟体動物のような柔軟性。
- (4) 同じ国でも土地が変わるだけで別世界になる。標高3800mの地を流浪するカシミールの家族と。



異文化に惹かれたのは、高校の世界史の授業がきっかけだ。コーランの詠唱、祈りの情景、インドの異形の神々——初めての映像や音に心を奪われ、いつか自分の目で世界を見てみたい、と思った。

東外大に進学し、ヒンディー語を専攻。2年生のとき、毎日新聞の学生部で取材記事を寄稿するようになった。取材といっても旅費はすべて自腹。アルバイトで旅費を稼ぎ、部活の合間を縫っては取材に出かけた。震災後、旅の途中で訪れたチェルノブイリ近郊の村が、福島県南相馬市に放射能測定器50台を贈ったことを知った。その村と福島で4週間にわたる現地取材を行い、ウクライナと日本を結ぶ25年間の絆を明らかにした。

酒井さんが休学して世界放浪の旅に出たのは、2012年の春のことだ。

「このまま就職すれば、企業の価値観に染まってしまう。そうなる前に、自分の目で嫌というほど世界を見て回り、自分の頭で考えたいと思ったんです」

馬飼いの老人、流浪する山の民、都市の移民や同性愛者——その土地に根ざして生きる人たちと出会いたい。そう思い、あえて留学という常道は選ばなかった。現地出会った人の伝手をたどり、家に泊めてもらいながら、ユーラシア大陸を陸路で移動。行く先々でテーマを探しながら、ヨーロッパ・中東・南アジアの18カ国を1人で旅した。

「最初は、自分が見たことに意味や理由を探していたけれど、理解できないことがほとんどでした。わかったのは、ルールや基準が変われば、善悪や美醜の基準も変わるということ。でも、安易な意味づけはしたくないんです。一番大事なことは、見てきたこと全部を忘れないこと」

将来は人の想像力に働きかける仕事をしたい、と語る酒井さん。今は就職活動を控え、進路を模索中だという。

「東外大は、世界の広さを実感できる場所。失敗を恐れず、心が動くものを大事にして、飛び込んでほしいですね」

Yukari Sakai

2010年東京外国語大学入学。
2012年3月～8月、自分の目で世界を見るためにヨーロッパ・中東・南アジアの18カ国を放浪した。毎日新聞学生部の執筆者としても活躍中。空手二段。埼玉県出身。

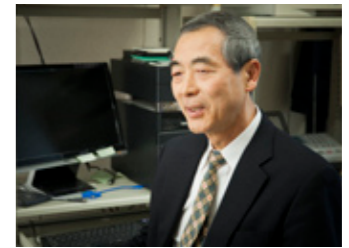
興味を持って
働きかければ、
人は導いてくれる。



News

お世話になりました。
退任する先生たちからの
「手紙」

私が大学1年のとき、竹之下休蔵教授の体育社会学の講義(1967年で、文化としての遊戯とは何かを追求した、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』を知りました。外語大に着任したのは1975年でした。当時の担当は「一般体育」でしたが、学内改革(1995年)によって「専修専門科目(スポーツ経営学)」も担当するようになり、2013年3月末で定年退職します。この間、「ヒトはなぜスポーツを行うのか」「スポーツに何を求めているのか」



阿保雅行
ABO Masayuki

大学院総合国際学研究院
言語文化部門
(スポーツ身体文化科目、スポーツ経営学)
教授

「スポーツと体育とは何か」「学業(勉強)とスポーツの両立は可能か」「社会におけるスポーツの意義とは何か」「スポーツの順機能を生起させるシステムは何か」などについて、学生に課題を提起して一緒に考えてきたつもりです。

国内外のスポーツ団体や教育機関の理念は、個人の心身の発達と社会の発展に寄与することが基本的に挙げられております。ホイジンガの視点はその理念を達成するための重要なヒントを与えてくれると思います。



●お薦めの1冊
『ホモ・ルーデンス』
中公文庫
ホイジンガ(著)
高橋英夫(翻訳)
一言……「ヒトはなぜスポーツを行うのか、スポーツに何を求めているのかなどについてハッと気づかされる一冊です」



内海 孝
UTSUMI Takashi

留学生日本語教育センター
教授

コロンビア大学の東アジア図書館で調査していると、女性が声をかけてきました。外大の卒業生です。メールをおやりになるのなら、私のパソコンを使ってください。2001年5月24日か翌日のことです。ハワイ大学からコロラド州デンバーを経てのニューヨーク到着直後でした。1931年以降、同大学で日本学を開講した角田柳作を調べていました。サイデンス・テッカー、ドナルド・キーンも、角田の学生でした。声をかけてくれたのは外大

を卒業後、オハイオ大学院で修士課程を終えて、東アジア図書館で働きはじめたばかりの黒澤美恵子さんです。2012年秋、エール大学からスタンフォード大学の東アジア図書館に移ったと連絡をうけました。それは東アジア研究部門が縮小化するアメリカの現状下で、拡充する同大学東アジア図書館が彼女の才覚と専門性をいかに高く評価しているかをあらわしています。子育てと司書をこなす黒澤さんを今後も応援したい。

を卒業後、オハイオ大学院で修士課程を終えて、東アジア図書館で働きはじめたばかりの黒澤美恵子さんです。2012年秋、エール大学からスタンフォード大学の東アジア図書館に移ったと連絡をうけました。それは東アジア研究部門が縮小化するアメリカの現状下で、拡充する同大学東アジア図書館が彼女の才覚と専門性をいかに高く評価しているかをあらわしています。子育てと司書をこなす黒澤さんを今後も応援したい。



●お薦めの1冊
『族譜・李朝残影』
岩波現代文庫
梶山季之(著)
一言……「著者に会ったことはない。だが、ハワイ大学の梶山文庫の質に驚いた。その驚きと著者の想念が私をして、この作品集を企画させた」

ポーランド人に初めて接したのは、学生時代、ロシア語通訳のアルバイトとして、重量挙げ選手団の世話をしたときです。試合後、都内を案内し、開催中の大阪万博にも引率しました。彼らが話すポーランド語のシュー音が、ロシア語よりずっと強烈に聞こえたのを覚えています。

実は、ゴリキーの寓話に登場するイゼルギリ婆さんも同じ印象を抱いたようで、ポーランドでの男性遍歴をこんなふうに語ります。「あたしやあいつらの蛇のよ



●お薦めの1冊
『アンナ先生の言語学入門』
東京外国語大学出版会
アンナ・ヴェジビツカ(著)
一言……「目から鱗! 言葉のおもしろさはもちろん、言語学の基礎が学べる一冊です」



川口健一
KAWAGUCHI Kenichi

大学院総合国際学研究院
言語文化部門(ベトナム文学)
教授

高校卒業後、道草を食いながらもベトナムと出会いました。ベトナム戦争を理由に挙げることもできませんが、やはり「偶然」の結果であると思います。そのせいか、学部生のときはベトナム語の成績は振るいませんでした。家で小説を読んで過ごしていたことも理由の一つです。文学の面白さに気づいた(と思

う)頃には、同期生はすでに卒業し、1人取り残されていきました。その後、大学院でベトナム古典文学を胃の痛みに耐えながらじっくりと勉強で



●お薦めの1冊
『文化と歴史』
創文社
フィリップ・バグビー(著)
山本新・堤彪(訳)
一言……「文化と歴史をめぐる基礎概念を入念に考察した比較文化の入門書」



石井哲士朗
ISHII Tetsushiro

大学院総合国際学研究院
言語文化部門(ポーランド語)
教授

うな言葉がわからなかった。年中、シューシュー言っているのさ。何をシューシュー言っているのかね。ありや神様が、あいつらがうそつきだからあんな蛇語を与えたのさ。後に本腰を入れてポーランド語を学び始めて気づいたことは、シュー音の強さだけではなく、文法がロシア語に輪をかけて奇怪千万なことでした。ポーランド人がみناولそつきというのはまったく中傷ですが、彼らの言葉が蛇の如しという形容は、的を得ているかもしれませぬ。

きたのはとても幸運でした。外語大での長い教員生活で、活力あふれる若い学生諸君からさまざまな刺激を受け、貴重な思い出がたくさん残りました。1つ残念だったことは、在外研究中にハノイで交通事故に遭ったことです。左足に人工骨が入り、行動が制限を受けることになりました。同僚の諸先生、職員のみならず、支えられ、無事勤めを果たすことができ、嬉しく思っています。いくつか宿題が残されていますので、今後取り組んでいく所存です。

お世話になりました。
退任する先生たちからの
「手紙」



関口時正
SEKIGUCHI Tokimasa
大学院総合国際学研究院
言語文化部門(ポーランド文化)
教授

20年前、私はロシア・東欧学科ポーランド語専攻のポーランド文化を担当する教官として外大に着任しました。確かにポーランドに留学してポーランド文化を勉強した私でしたが、まさか日本にもポーランドの言語や文化を専門的に教えるコースができるとは夢にも思っていませんでした。これようやく、自分が勉強したことを社会に還元できると思い、それははりきって仕事を始めました。思い出はさまざまありますが、1年次の地域基礎合宿、

2・3年次のゼミ合宿そして4年次の卒業合宿と、毎年のように一緒に外大を出かけて勉強をした学年のみならずとの交流は今でも大切にしています。この5年間ですっかり軌道に乗った日本、韓国、中国のポーランド学科の交流も、本当にやってよかったと思える事業です。ポーランド政府の留学奨学金は大学院レベルしかなかったところ、学部生に対しても支給してほしいと運動して、毎年6人の外大生が1年間留学できるようになったのが嬉しいことでした。



高橋清治
TAKAHASHI Seiji
大学院総合国際学研究院
国際社会部門(ロシア史)
教授

ロシアでは旅立ちを見送る際、旅立つ者、見送る者がワインやウオッカで乾杯します。この最後の一杯を「パサシヨック」といい、旅路の平安を祈って「ナ・パサシヨック!」と乾杯します。元になる単語「ポーサフ」は杖、旅人の杖です(高位聖職者の錫杖の意味も)。語源をたどると、大地を耕した農具「ソハー(犁)」にもつながります。杖を手にロシアの大地を踏みしめた巡礼の人々など、ロシアの文化的伝統に根差した味わい深い言葉です。



●お薦めの1冊
「英訳新約聖書」
一言……「世界の文化や政治を勉強する上で聖書は必読書」



●お薦めの1冊
「ロシア貴族」
筑摩書房
Yu.M.ロートマン(著)
桑野隆、望月哲男、渡辺雅司(訳)
一言……「文化記号論によってロシア史に切り込んだロートマンの考察の検討を」



敦賀陽一郎
TSURUGA Yoichiro
大学院総合国際学研究院
言語文化部門(フランス語)
教授

言語構造は? フランス語体系の中核は?と考へてみると四半世紀は光陰矢の如しです。しかし、それほど見えてはきません。生物学と脳神経細胞間のあるいはDNAとのつながりも考えられるようになってきました。「言語学は記号全般の研究としての記号論の一部をなし、記号論は一般心理学に含まれる」との構想はSaussure(ソシュール)の言葉です。心理学が生物学に還元される、と

いうのはPiaget(ピアジェ)の言です。また、自然科学は最終的には物理学に還元されるとも言われます。言語能力は人間の起源と直結し人間の心・体と結びついています。しかし、孤立した個の内部とだけではなくて個と個の間の関係との関連で進展して行くように思えます。個の基盤の問題であり、複数の個の間の問題でもあります。数百万年にもわたる人間と言語機能の進化とを前にすると、更なる一世紀でさえ矢の如しでしょう。



●お薦めの1冊
「生物学と認識」
J.ピアジェ(著)
一言……「身体・脳、認識・言語能力が如何に形成され進化するかを問う」

東京外国語大学出版会刊行の注目の2冊

『中国近代史』

本書は、中華民国の外交官を務めた中国外交史研究のパイオニアである著者が、アヘン戦争から抗日戦争初期までの歴史を生き生きと描いた古典的歴史書(初版1938年)です。これ

はまた、現在の中国情勢と中国近代史の理解に大きな光をあてる深い世界認識と斬新な歴史研究であり、訳者である佐藤公彦教授による詳しい解説も読みどころです。



蒋廷黻 著
佐藤公彦 訳
2012年11月15日発行
四六判/上製/272頁
定価2,625円(税込)

『千鳥足の弁証法——マシャード文学から読み解くブラジル世界』

批評家スーザン・ソントグによって「ラテンアメリカ最高の作家だ」と評されたブラジルの文豪マシャード・ジ・アシス。武田千香教授は、そのマシャードの最高傑作『プラス・クーバスの

死後の回想』の物語世界を、独自の視点で詳細に読み解き、その本質に迫ります。今後ますます注目される「ブラジル」を、人・社会・文化という観点からも考察した渾身の一冊です。



武田千香 著
2013年3月15日発行
四六判/上製/328頁
定価2,940円(税込)



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉本誌に4度目の春がめぐってきた。定期刊行物となって第一期7号分の企画編集に携わってみて、東外大の学生、卒業生、教職員はもちろん、さまざまなかたちで関わりをもつ人びとの表情のゆたかさを、毎号目の当たりにして、その度こちらまでゆたかな気分になった。4月からは新学長のもと、東外大のひとつも組織も、そして本誌もあらたな航海に出る。前途洋々たることを祈る。
(編集子) Ⅴ

GLOBE VINE
グローバルワイン

2013 Number 7

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2013年3月発行

発行 東京外国語大学

〒185-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経BPOコンサルティング

印刷 大丸グラフィックス

アートディレクション 犬飼健二

表紙撮影 市橋織江

デザイン 茂谷淑恵(犬飼デザインサイト)

©東京外国語大学2013

本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。